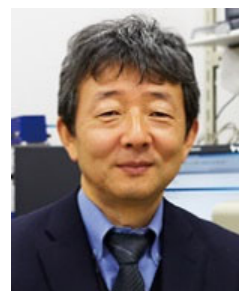


クロマトグラフィー科学会会長メッセージ

(近畿大学薬学部 教授) 鈴木 茂生



今年度より、「クロマトグラフィー科学会」の会長に就任いたしました。当学会は日本化学連合の所属学会でも規模の小さな学会と思われませんが、学術集会（シンポジウムと年会）を年に二回開催、英文の学術雑誌を年三回発行し、会員への配布に加え、J-Stageからも公開をしております。年会では各種学会賞の授与も行っており、これらの活動はすべて会員の持ち回りで運営しています。

当学会は「クロマトグラフィーに関する基礎ならびに応用研究の発展向上を図り、クロマトグラフィーの研究者および技術者の連携と交流を深め、科学技術と文化の向上に寄与する」ことを目的として創立されました。特に研究者—技術者間の連携が目的であることから、学会役員に多くの企業研究者が含まれていることも特色の一つです。

最近の化学系学会に共通していることかと思いますが、クロマトグラフィー科学会が開催する年会、シンポジウムの参加者の顔ぶれに大きな変化はなく、閉塞感があることは否めません。ただ、各シンポジウムの実行委員長が独自に特別シンポジウムや講演者を選定しており、分離科学の基礎から医薬品等の分析法バリデーションに至るまで、各回、多様なプログラムを提供しており、新しい情報に触れる場、あるいは特定のテーマをまとめて聴講できる場として活用いただいております。現在の個人会員数は380名程度で、その一割が学生会員です。学生会員を含む若手研究者の育成に力を入れている点も、クロマトグラフィー科学会の大きな特徴となっております。ポスター賞の選考に加え、トラベルアワードとして学会旅費を支援する事業も実施しており、学生にとっても本会会員であることのメリットは大きいと思っています。また、会員はそれぞれの研究室の特色を良く理解しており、学生たちの研究背景を十分に理解した上で突っ込んだ質問をするなど、若手を教育する場としての成果を上げているものと確信しております。

日本化学連合の設立時期は、日本の化学研究が大きく地盤沈下した時期と重なります。分析化学分野におけるtop10論文数は1990年代、日本は米国に次ぐ2位を維持していましたが、2005年前後からは15位以下にまで急落しています。優秀な若者達が大学よりも企業に進む傾向が顕在化した時期とも重なります。さらに、この頃より化学系学会から企業研究者の退会が増加し、企業会員の脱退も相次ぎ、学会の財政状況が逼迫いたしました。また、2005年には大学改革が実施されました。私は私学に所属していますが、この頃より国立大学の先生方が非常に忙しくなられ、早朝から大学の校務をこなされるなど、本来は最先端の研究を担うべき大学研究者の研究時間が大幅に減少しているように感じています。

そして2020年は新型コロナの蔓延が社会に大きな影響を与え、学会にも様々な形で影響を及ぼしつつあります。学会の存在意義を示すはずであったシンポジウムなどの研究集会が開催できなくなり、誌上開催やオンライン開催が当たり前となりましたが、特に若い方々にとって専門家との交流の機会が大幅に奪われてしまうことは残念でなりません。コロナ蔓延下でも会員に学術交流の場を提供するのが学会の使命かと思われませんが、難しい舵取りが求められることは間違いがありません。

日本化学連合には、化学研究者を取り巻く状況を大局的に見つめ、よりよい化学教育および研究環境を確保できるように先導いただくとともに、各学会の自主性を重んじつつも、各学会の連携や学術活動の支援、およびこの国の化学技術の興隆を主導していただきたいと切に願っております。